過去からの小包

一ヶ月半前に日本から送った小包が二箱、ドイツの自宅に届いた。横浜と東京からゆうに一週間外れて出したはずの荷が、一日違いで次々に着いた。きっと同じ船の片隅で、南回りであればマラッカ海峡やスエズ運河を通り、地球の半分をぐるりと約二万一千キロメートルの旅路を過ごしてきた小包達だ。

しかしこの日、差出人でもある一ヶ月半前の私と今現在との私が、この地理的距離よりずっと異なる事実を目のあたりにすることになる。

小包の中身は捨てようか、持っていこうか思案して、最後の最後まで横浜の実家の片隅に残っていた品々だった。書き損じた文字を残した和紙の便箋、母の芥子色の絹の腰紐、一回使って仕舞い込んだままだったすき焼鍋、小学生の頃に標本屋で買った真っ赤な珊瑚、白い陶器に入った中国の印泥、父の個展の案内ハガキの束、大見出しの付いた二〇一一年三月十三日の新聞、実家のソファの背もたれに最後までかかっていた日に焼けたレース、両親が昔フランクフルトで買ったドイツ製の鋏、老人介護のために用意しながら一度も出番のなかった乳児用スプーン、スーツケースに入らなかった乾麺や味噌、そして一九九八年～二〇一〇年までの父の日記などである。

こうしてみると、自分の価値観を刑事事件の証拠品のようにまざまざと提示されたようで、私が拠り所とするものさしが、いかに奇妙であり、一定の尺度などないことを思い知らされた。理性より感性で出来たものさしは、あるときは一単位が通常の何億倍もあり、

あるときは何兆分の一しかない変な目盛りを持っている。

それでも母国から届く贈り物は、自身で送ったものであってもいつも嬉しいものだ。

けれども今回は、単なるプレゼントとは違う。建て直しの効かない恋愛関係の最後の離縁状を受け取ったような、やる瀬なく切ない感覚も一緒に送られて来たのである。

包みを解くまえに、まずは一息深呼吸。

鋭いカッターで荷紐を解き、

段ボールの腹に慎重にメスを入る、

すると、とたんにあの実家の匂いが漂い出した。

この匂い、これこそ私が故郷に持つ酸っぱい感情そのものに他ならない。

長い船旅を終え、何十年と実家に息を静めていた布や紙がこの地、この家で一斉にもの言い出し、嗅覚をはじめとするすべての感覚に訴え出た。予感はしていたものの、それはあまりにも強烈で息苦しい。主張するそのメッセージは、「郷愁」などという一言では言い表せないもっと複雑なもの。無機質な物が発するより、もっと感情を持つものだ。

父の死後、それに伴う母の施設入所、実家売却などの忙殺を理由に、自分の感情に麻酔をかけていたのが、ここで一気に現実に引き戻された。過去の私が、おざなりにしていたメランコリーをツケに回してきた。

この素麺やふりかけを買ったあの馴染みのスーパーも、もう足繁く通うこともないだろう。この帯締めの入っていた桐箪笥は、今頃はうちの家族でない人達によって、引き出しが開け閉めされているのだろう。

すかさず今の自宅の整理ルールに従って、印泥は書道用具の引き出しへ、カップラーメンは息子の胃袋へとさっさと片付けて、ここの時間とこの場所に品々を同化させてしまわずにはいられない。この現実にそれぞれの居場所を与えて、まるで昔からそこにあったかのように役割を与えるのだ。

そして、これらのエトランゼ達にも一週間後、半年後と経つうちに、段々とこの家の匂いが染みついていくことだろう。

はてな、山積みになった父の日記は、何時になったらじっくり読める機が来るのだろうか。またの未来の感性が、楽しみでもあり、怖くもある。

二千十五年七月九日　　真美